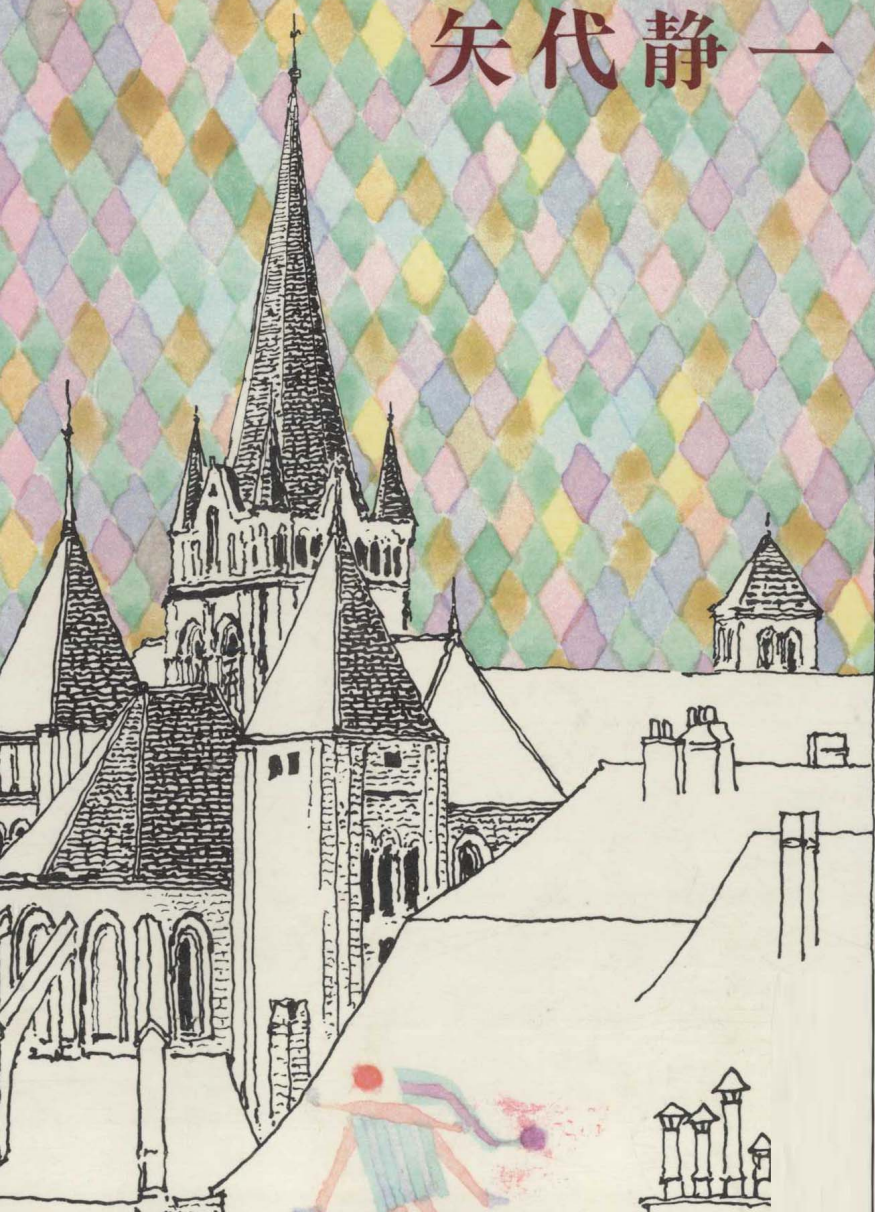
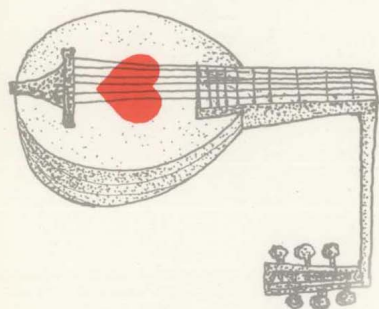


えくぼを忘れるなんて 矢代 静一



れるなんて

矢代 静一



新潮社版



© Seiichi Yashiro, 1978 Printed in Japan

えくぼを忘れるなんて

一九七八年五月五日 印刷
一九七八年五月一〇日 発行

定価／九八〇円

著者／矢代静一

発行者／佐藤亮一

印刷所／株式会社金羊社

製本所／大口製本株式会社

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六一五一
編集部(03)二六六一五四一一

郵便番号 一六二二

振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

王国の記念碑 林 青梧

学生を押さえつけ、政財界に結びつく巨大な私学経営者のめざした理想の王国とは何だったのか。栄光の頂きから打ち倒された彼の残したものは……。

九八〇円

約束の大地 角田 房子

アマゾンこそ人類のために約束された大地だ!! 昭和初期、熱的使命感から未開の泥地に生涯を賭け、黄麻産業を築いた日本人。その強烈な生の足跡を追る。

九八〇円

ブルメリアの木陰に 渡辺喜恵子

常夏の島ハワイにこんなにも哀しい日本女性の愛の歴史があった——写真花嫁として移住者のもとへ嫁いだ松永美穂の苛酷な運命のうちに、『移民』の悲惨な実態を描く。

九〇〇円

タンタラスの虹 渡辺喜恵子

一枚の写真を頼りに移民の許へ嫁いだ美穂は幼い子供達を遺され、夫に死なれた——観光地ハワイに生きた日本人女性の数奇な運命。『ブルメリアの木陰に』第二部。

八五〇円

風に咲くプアマレ 渡辺喜恵子

突然やってきた日米開戦の日。やっと纏んだ幸せも束のま、ハワイ移民の許へ嫁いだ美穂は、再び巨大な運命の波に翻弄される——『ブルメリアの木陰に』完結篇。

九〇〇円

異端の言説・石橋湛山 小島直記

暗い谷間の時代、経済ジャーナリストとして、異端の言説を吐き、次代を予見した石橋湛山。我々唯一の言論人首相の生涯を克明に跡づける、長編伝記文学。

各九八〇円

天の花と実 藤原審爾

海のロシナンテ 宮原昭夫

男嫌 い 吉行理恵

白き旅立ち 渡辺淳一

愛のむこう側 朝吹登水子

夜あけのさよなら 田辺聖子

天はなぜ、若い男女に苛酷な運命を担わせるのだらうか？ 一つの日に、二人の愛は結ばれるのだろうか？ 土と炎の里、宿業に芽生えた恋が変転のはて花開くまでを描く長編。九五〇円

十人の新米マドロス、無知で無責任で身勝手な酒呑みの野郎どもと、けなげにもひたむきに彼らにつかえるボロ漁船ロシナンテ号の、涙ぐましく心暖まる交遊の物語？！ 八〇〇円

私は、キザで、卑劣で、おしゃべりで、ひとりよがり、ひ弱な男にしか会えなかったのか？——『寂しい狂い猫』と対話しながら詩人吉行理恵が語る女心の軌跡。連作小説集。八〇〇円

最後の命を燃やし尽すように、自分の体を医学に捧げた女がいた。彼女が生きた証しとして残そうとしたものは？ 揺籃期の日本を背景に、志願解制第一号となった女を描く。 八〇〇円

一九五〇年夏、愛を知り愛を奪われた紀川紗良は、三十歳の自由な女として再びパリを訪れた。著者が育った上流家庭の生活と娘時代を半自伝的に描く初めての書下ろし力作！ 九五〇円

楽しい別れ、淋しい別れ、苦しい別れ——さまざまの恋の終りを味わって、生きることを知ったレイ子……。失われた青春の苦さと痛みがよみがえり、忘れられない恋の物語。 六〇〇円

魂の試される時^{上・下} 丹羽文雄

榧^{かや}の木祭り 高城修三

夏 中村眞一郎

蕁^{いら}麻^{くさ}の家 萩原葉子

残りの雪^{上・下} 立原正秋

悲しみの歌 遠藤周作

高校生川瀬蕭が異常な思慕をよせて遂に結ばれた年上の書道家土屋秋は、かつて父がもてあそんだ女性だった。人生の不思議と現代の愛の形と罪の意識を描写する力作長篇。各九五〇円

名譽と富と花嫁を求めて男達は榧の実を集めて走りまわる。最高の女性をえた者は土に埋められ来年金色の榧の実を村にもたらすのだ。日本人の原型に迫る芥川賞受賞作品。九〇〇円

ある日突然、妻がわけもなく自殺した……激しい精神の障害と性の無能力からの回復期の、奇妙な性の冒険を、甘美な記憶の森の中の^上性と^愛のロマネスクとして描く長編。一六〇〇円

若い男と出奔した母、家族の修羅場とは別の世界に生きる父。——天才詩人堀田孝太郎を父に持ちながら、一族の醜薄な仕打で暗い青春を送った著者の魂の告白。女流文学賞受賞。七六〇円

置き手紙を残して突如失踪した夫、幼い息子を抱え、理由なき別離に苦悶する美貌の妻。別れに始まり、中年の男との新しい愛と性に濡れる女の春秋を華麗に描く長編小説。各八九〇円

荒涼とした現代、優しく生きることが愚かなのか。愛することしか知らない役立たずの外人ガストンが、東京新宿に現われた時、華やかなこの町にも人生に疲れた人々がいた。八〇〇円

道化と愛は平行線 矢代静一

黄金の日日 城山三郎

落日燃ゆ 城山三郎

アラスカ物語 新田次郎

八甲田山死の彷徨 新田次郎

ホヤわが心の朝 福田紀一

世界が劇場なら、僕の役割は道化……。失恋ばかりの主人公、思わぬことから結婚したが、仕事は失敗、おまけに病氣。さて、そこから笑顔を取り戻す道化らしい方法は？ 九八〇円

南蛮貿易の呂宋助左衛門、茶道の千利休をはじめ不羈奔放な人材を輩出し、信長、秀吉の圧力に対抗した商業自由都市（堺）に展開する男たちの夢と雄飛、波瀾万丈のロマン！ 九八〇円

戦争回避への献身にもかかわらず戦争責任を問われ、A級戦犯として処刑された元総理、外相広田弘毅。複雑な国際政治を背景に、その激動の生涯を再現する伝記文学。 九八〇円

明治の中頃アラスカに渡り、エスキモーの指導者となって終生日本へ戻らなかったフランク・安田の波瀾と情熱の生涯を、雪と氷、オーロラとツンドラの世界に描く書下ろし長編。一二〇〇円

日露戦争を目前にして厳寒の八甲田山中で苛酷な人体実験を強行した二つの陸軍部隊……。自然の猛威に挑み死闘をくりひろげる生き地獄を迫真の筆に描く。 九二〇円

受験もだめスポーツもだめの私立高校に、ホヤに変身した生徒が入学してきた！文学の常識を粉碎した奇想天外、爆笑プラス感動の世界をつぶさに描いて誕生した青春文学！！ 九五〇円

木

こだま

—或る青年期と追想の物語—

精

北

杜夫

幽

—或る幼年と青春の物語—

霊

北

杜夫

あ

る

愛

中

村光夫

青

銅

時

代

小

川国夫

夢

の

碑

高

井有一

七

里

ヶ

浜

宮

内寒彌

ヨーロッパを彷徨する孤独な心に抱く解決のつかぬ恋の追憶と将来への自負と怯え。その間を揺れ動く青年期の内奥の光と影……。著者自身の魂の経験を再構成した「心の自伝」。九〇〇円

自分はどこから来て、どこへ行くのか？ 失われた幼年期の記憶を求めて、深層意識を溯る青春の希望と不安……。『木精』の前編に当る著者二十代の処女長編。新装決定版。七五〇円

新しい愛がはじまった。しかし予期した喜びは湧いてこない、なぜか。わたしは自分が愛しているほど愛されていない！ エロスの歓喜から幻滅の淵へと彷徨う女の愛。一二〇〇円

突然の不幸——破局の淵で立ちすくむ保彦と満枝。生の光と闇の奇烈なせめぎ合いを凝視し、藤枝の町、焼津の港、御前崎の海を舞台に描いた青春の受難劇。六八〇円

明治30年代のはじめ、秋田の角館から相前後して上京した作家田口掬江、西家平福百穂、出版人佐藤義亮をモデルに、明治の青年の陰影深い青春と友情と人生を描く長編小説。一二〇〇円

へ真白き富士の嶺 緑の江の島……明治43年1月23日、七里ヶ浜沖合で起った返子開成中学校生徒12名の遭難事件と事故の責任を負った若い教師の運命との複雑なかわり。九八〇円

目次

第一章	呑気な遺言状	5
第二章	涙の见えない悲しみ	16
第三章	青髭おじさんと小猫ちゃん	57
第四章	異聞一寸法師	99
第五章	誓いの言葉の甘い蜜	127
第六章	夏は貸自転車に乗って	162
第七章	素直な心	197

装幀／安野光雅

えくぼを忘れるなんて

第一章 呑気な遺言状

僕こと、辻真一郎はいよいよ死ぬことになった。まだ三十歳をちょっと越したばかりの若さで、志半ばでこの世を去るのだから、夭折ようせつということになる。恐らく僕の死を知って嘆き悲しんでくれる人は、一部の識者だけであろう。なんとすれば、僕は劇作家兼演出家として、まだほとんどその真価を世間から認められていないからだ。それが残念なので、妻よ、僕は後世の心ある人々のために、「僕自身が僕に捧げる讃辞」を書き綴ることにきめたよ。

僕は、昭和の御代みよの初めに、東京の銀座の洋服屋の一人息子として生れた。幼稚園、小学校、中学校を通して、常に首席であり、神童の誉ほまれが高かった。更に、単に頭脳明晰であるばかりでなく、人柄もいたって大様で、柔かな心の持主であったから、幼稚園のときは幼稚園の級友の女の子たちから、小学生のときは小学生の級友の女の子たちからといった具合に、常に女性たちから恋い慕われ、まぶしい視線でみつめられ、困りはてたものだった。このように神童でありモテモテ少年であった僕は、長ずるに及んで、おのれが芸術的天分に恵まれていることを知った。そこで、僕は大学生活半ばにして、将来仏蘭西文学科教授を約束されていた象牙の塔を去り、群がり集まる女性を一顧だにせず、ことごとく捨て去り、ちゅうちよく演劇界に身を投じた。果し

て、僕はたちまちのうちに新進劇作家としての地位を確保し、また前衛的演出家として、ヨーロッパ先進演劇国にも、その名が轟くようになった。しかるに、それ盛りあれば衰うありの諺の如く、順風満帆であった僕のもとに、徐々に病魔が重く忍びこんできたのであった。宿痼の結核であり、医師は大手術を宣言し、あまつさえ成功率はフィフティ・フィフティであると、愁い顔でささやいたのであった。そのとき、賢明なる僕は、医師がフィフティ・フィフティと伝えたのは、単なる慰めであり、九十九・九パーセント手術は失敗に終るであろうということを、医師の顔色から判断したのだった。

惜しむべし、天、二物を与えず。請う、妻よ、そして心ある人々よ、夭折した僕の華麗にして才智あふるる戯曲作品、並びにいまは既に舞台写真にしかその記録をとどめ得ぬ鮮烈なる演出作品をひもとくことによって、僕を失ったがために多大の損失を受けた日本演劇界の悲しみを察して、哭け。更に、僕が天国にまかされたがために、生きるはりを失った、僕を恋慕うあまたの美しい女人のために、一掬の涙を流されんことを。

僕は筆を置いて、ここまでの讃辞を読み返してみた。すると、読み終ったとき、もう一人の僕がささやいたのであった。「もう一人の僕」と記すと混乱をおこしやすいので、辻真一郎の姓名のイニシアルをとって、S・T氏ということにしよう。

S・T氏は溜息をつきながら、次のように語るのであった。

「この讃辞を心ある人々が道化者のユーモアと受取ってくれるかどうか疑問だぞ。自己顕示欲の強い若者の、きれいごとの羅列と誤読されそうな危険が多分にあるな。そう誤読されないためにも、私生活をすこしあばいてみせた方がいいのではないかな」

僕はうなずいて、筆を取った。

かくのごとく、僕の公人としての一生は輝かしいものであったが、私人としての一生には常に女難がつきまとっていたのであった。これは僕があまたの女性に恋い慕われたというさきほどの証言と矛盾するではないかと思われる向きのお方もおいでだと思うが、さにあらず。僕は、その短い生涯において、ただ一人恋い慕ったミャンミャンこと、太刀川泉嬢に見事にフラレテしまったのである。ミャンミャンは、一言で言うならちびの魔妖精であり、曾祖父がスペイン人であったためかどうか知らぬが、その言動はすこぶる突飛で変幻自在であった。スペイン貴族（とミャンミャンは語ったが、多分デタラメであろう）の流れを汲む家系の者が、なぜ東京の場末の貧しい果物屋の娘として生れたのか理解はできぬが、それはそうであった。果物屋の娘は、またレヴェー団の踊り子でもあった。僕の名誉のために誓っているのだが、さいしょにオチョッカイを出し、僕をヒッカケタのは彼女の方であった。純真無垢なる僕は、彼女のあどけない無意識の媚態にコロリと降参し、彼女を一人前の女優にするために、演技指導と、情操教育と、知的思考法を教えこむことにやぶさかではなかった。かくのごとくこと芸術面においては数歩も彼女より抜きんでていた僕も、こと処世術にかけてはミャンミャンよりはるかに劣っていた。そのため、僕の懇切丁寧な指導によって、めでたく映画界で清浄野菜のごとき純情可憐な娘役として売出されるようになったとき、彼女は愛人の僕をコブツキのように感じ、その出世のさまたげになると判断したのであった。

S・T氏は、そのころのあわれだった自分を思いおこし、これ以上は涙なしでは語れぬと判断

し、ミャンミャンの記述はここで打切れとささやいた。

僕の女難は更につづくのであった。失意の僕は、通常一般の若者が進む道を進み、酒色に溺れ、ゆきずりの女に甘言を弄し、その女に愛を抱くことなしに愛の行為をなした。しかるに、この女は母一人子一人で、明けても暮れても自宅でミシンを踏みつづけている孤独なお針子ではあったが、その心根はやさしく、ノッポの聖妖精であったが故に……。

S・T氏は再び溜息をついた。どんな事情があるにせよ、かりそめにも現在妻として迎えている女を聖妖精と記すバカがいてよいものであろうか。S・T氏は、やはり妻のことはこの「讃辞」の中で触れるのはよそう、省略しよう、ときめた。従って、或る春の朝、「僕」が死への恐怖からのがれたいために、妻にヤツアタリし、脇腹を強く蹴り、妊娠中の彼女を横転させたがために、胎児を流産させてしまったことは、語らなくてすむのだ。その考えはS・T氏を倅しよわせにさせた。そうだ、あのとき、カトリック信者であった妻の「僕」に対する無償の愛が偽善に見え、イジメタクなり、無理やり踏絵させたことも、闇に葬ってよろしいのだ。

さて、僕が入院したのは、親指の爪ほどの大きさの空洞が右の肺に発見されたからであった。しかし、両方の肺ともチューブを起しているのですぐに手術というわけにはいかなかった。一カ月ほど、薬を飲み、注射をうち、よく食べ、よく眠っているうちに、僕の心境は次のようになつたのであった。

なにか、こう、俺はなんのために生きるのかって考えたことがあった。なぜかっていうと、つまりは、ほかになにもすることがなかったからだ。で、そのことについて考え始めてみると……：そういうことを考えること自体がくだらないように思えてきて……いいや、それじゃいけないと、また考え直して……つまりだ、天から与えられた自分の才能を、より磨いて、よりしつかりした、よりたじろがない高みにまで、その才能をのばして……そう、そうして、そいつを天におかえしする。こいつが生きる目的じゃないのか？　そして俺の場合、天が与えてくれた才能は、なんだろう、ひょっとしたら……。

ひょっとしたら……演劇じゃなからうか、戯曲を書くことじゃなからうかと、「僕」は思っていたのであった。しかし、遅かったな。なぜ、体が丈夫だったころ、そのことに気づかなかつたのだ。S・T氏は、この台詞を戯曲ノートにメモした「僕」に対して、同情した。もし、将来健康になったら、この台詞を骨子にして戯曲を書く夢が捨てきれなかったのだ。そして、手術日がいよいよ近づくと主治医が告げにきた夜、「僕」はベッドの脇のサイドテーブルの、電気スタンドの弱い弱い光の下で、更にこういう台詞を書き加えたのであった。

俺は今日までずっと死ぬことへの恐れと戦っていた。だから死が生きる支えになっていたといつてよい。だが、あるとき、ふっと死んでもいいんじゃないかと思った。で、そのあともっとよく考えてみた。すると、どうだ、大事なことがぼんやりわかってきた。俺が、この俺が天から授かった才能をほったらかして、枯れっぱなしのまんまじゃ、天は決して、俺に死を与えてくれな